

多摩大学・広東財経大学教育交流プログラム実施報告

An Activity Report of The Educational Visit to GuangZhou city
in Tama University Asia Dynamism Program

久恒 啓一* 樋口 裕一* ○巴 特 尔* (○代表、執筆者)
Keiichi HISATSUNE Yuichi HIGUCHI BAATAR

2016年9月11日～16日にかけて多摩大学と広東財経大学が共同で教育交流プログラムを実施したので、概要を以下の通り報告する。

1. **実施期間**：2016年9月11日（日）～16日（金）
2. **実施地**：広東財経大学（中国・広東省広州市）
3. **参加者**：久恒啓一副学長、樋口裕一教授、バートル准教授、経営情報学部学生14名（1年生4名、2年生5名、3年生1名、4年生4名）の計17名
4. **本プログラムの実施背景と目的**：

4.1 背景

2015年4月、本学と広東財経大学は学術交流と留学生の相互交換に関する包括的な協定を締結した。これにより本学は広東財経大学にとって日本における初めての協定校となった。2015年度から今年度にかけて広東財経大学は教員1名、交換留学生計12名をそれぞれ本学に派遣したほか、広東財経大学内にて「多摩大学・広東財経大学交換留学生プロジェクトデスク」を設置するなど、本学との交流に積極的に取り組んできた。

これを受けて、本学では夏休みの期間を利用して両大学の教員と学生が一堂に会し、より教育的効果の高い交流会を合同で行うべく、広東財経大学との協議を経て本プログラムを実施するに至った。

4.2 具体的実施内容と目的

双方の教員による合同講義の実施、学生同士によるプレゼンテーション、現地進出日系企業の訪問、工場視察である。本プログラムは、教員同士の教育教授法の相互学習、学生諸君の多角的な視点や視野の広がり、直接的な交流による相互理解の促進を目的としている。同時に、ア

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

クティブラーニングの一環として現地の日系企業を訪問するなどして、学習意欲の向上と海外留学への動機付けという観点から海外を体験する機会提供も本プログラムの重要な目的である。

5. 日程・実施内容：

中国・広東財経大学短期留学プログラム日程表（9月11日～16日）

月日	午前	午後	夕方
9月11日 (日)	①7:15羽田国際線ターミナル3階出発ロビー Y団体カウンター7番、8番集合 ②NH923便9:15発 広州白雲空港13:05着	麗楓酒店チェックイン（広東財経大学構内）	歓迎会
	機内食		博雅軒
9月12日 (月)	7:00ホテルロビーで集合、朝食ガイド ③8:00～9:30 授業見学（「日本語同時通訳」） ④10:00～11:40講義（日本経済）	14:00～16:00企業訪問（明治アイスクリーム）	珠江ナイトクルーズ
	朝食（学食）	昼食（学食）	夕食（珠江ナイトクルーズ船）
9月13日 (火)	朝食後、8:30出発 10:00～12:00 企業訪問（広州トヨタ自動車）	①14:30～17:30日中大生による発表会 （「共通科目」） ②15:00～17:30公開講座（久恒啓一教授）	19:00～20:30公開講座（樋口裕一教授）
	朝食（学食）	昼食（学食）	夕食（学食）
9月14日 (水)	朝食後、8:30出発 10:00～12:00深圳市ホンハイ（富士康集団）訪問	深圳市内視察（翌日が中秋節で道路が混雑する可能性が高いため、昼食後は直接広州に戻る予定）	パーティー
	朝食（学食）	ホンハイ社内食堂（お弁当）	夕食（パーティー）
9月15日 (木)	朝食後、8:30出発 広州市内視察（孫中山大元帥府、沙面、陳家祠、上下九步行街など） ※久恒先生ご帰国		
	朝食（学食）	昼食（広州市内レストラン）	夕食（広州市内レストラン）
9月16日 (金)	11:00ホテル出発	広州白雲空港NH924便14:15発 羽田国際空港19:45着・現地解散	

1日目：9月11日（日）羽田空港→広州白雲空港

- ・ 広東財経大学外国語学院日本語学科の梁燕碧学科長、沢崎真希先生らの出迎えを受け、ホテルに到着後、学内の教育施設を見学。外国語学院の入っている棟の廊下には古今東西の偉人たちの写真と彼らの言葉が飾ってあった。マンデラ大統領、シェイクスピア、アウンサンソーチャー女史、モーツァルト、レオナルドダビンチ、ゴッホ、ショーペンハウエル、マルクスなど。日本人では、小野小町、鈴木晴信、柿本人麻呂、鴨長明、柳宗悦、星野道夫、宮崎駿、大江健三郎。宮崎駿は、「私には紙と鉛筆があればよい」。大江健三郎は、「知る、分かる、悟る」を分けて説明をしていた。2015年秋学期から本学で1年間交換留学していた4人の学生たちがボランティアで私たちのガイドを担当。最近完成したという図書館も見学。7階建ての綺麗なそして壮大な建物である。
- ・ 広東財経大学は、学生数26,000人、教職員数1,300人に上る広東省立の総合大学の一つで、広東省内の行政や司法機関、企業に人材育成を行っている。アジアの新興国の大学は新しく規模が大きく素晴らしい施設が多い。教育というものが国家100年の計の中心になっているからだろう。
- ・ 18時半からは外国語学院主催の歓迎会。外国語学院の曾副学院長ら4人がホスト。曾副学院長の挨拶に続いて、訪問団を代表して久恒副学長がご挨拶。多摩大と広東財経大学との協定に至った経緯と実績をまず説明され、その後見学した外国語学院の印象に加え、中国で「革命の父」と呼ばれている広東省出身の孫文と彼の中国革命を援助した日本人（梅屋庄吉、宮崎滔天など）に関する歴史的に事実を語りながら日中は互いによく理解しあうことが大事で今後両大学間の交流をさらに発展させて行くべきことを語られた。

2日目：9月12日（月）合同講義、企業見学、市内視察

- ・ 8:30 両大学の副学長、教員による意見交換会。広東財經大学から杜承銘副学長以下計6名、本学から久恒副学長以下3名が出席した。まず、両大学の副学長よりそれぞれの大学の概要説明がなされ、次に2015年度から開始した両大学間の交換留学プログラムの実施状況とその結果を振り返り、最後の今後における交流について学生だけでなく、教員同士の交流（相互派遣、共同研究など）を深めていくことで合意に至った。



広東財經大学：杜承銘広東財經大学副学長、曾文雄外国語学院副院長、李俊教務処長、李新博国際交流・合作処長、梁燕碧日本語学科長、廖贇国際交流・合作処副科長。
多摩大学：久恒啓一多摩大学副学長、樋口裕一教授、バートル准教授。

- ・ 午前中は合同講義を実施。広東財經大学の呉楓先生（「日本語同時通訳」）と呉明宇先生（「日本経済」）よりそれぞれ講義を行われた。教員はレベルが高く、非常に熱心に講義をされており、学生の授業態度も極めて良い。参加した学生は4年生で、11月ごろから就職活動となるが、個人で人材派遣会社を回り活動をすると言う。大学の先生は一切面倒を見ない。教授陣は就職の世話から解放されており教育に専念できる体制となっている。
- ・ 午後は企業見学を実施。明治アイスクリーム社を訪問。小林修工場長のご紹介によると、同社は1993年に中国に進出し、翌年からアイスクリームの生産を開始。従業員数は250名で、「好味（おいしい）」「健康（健康）」「開心（楽しい）」をモットーに、現地にて研究開発を行い、原料はすべて海外か現地調達を行い中国の消費者のニーズにあった商品を年間の1万トン生産し、中国全土に販売網を展開している。現在では、中国国内でアイスクリームのほか、お菓子、牛乳、ヨーグルトなど乳製品の生産と販売も行っており、今後は健康食品や介護食品に注力する予定。質疑応答の際、学生たちはそれぞれ高い関心と問題意識を持った様子で積極的に質問をしたり、自分の意見を述べたりしていた。



3日目：9月13日（火）企業見学、プレゼンテーション、合同講義

- ・朝から広州トヨタ自動車の工場を見学。吉田篤志人事総務部副部長より広州トヨタ自動車の概要の説明をしていただいた。同工場は2年ほど前に中国政府から認定された広東自由貿易区内に建設されたトヨタ自動車と広州汽車の合弁会社の最新工場（従業員数1万人）。この工場はグローバルトヨタ 21世紀のモデル工場として位置づけられており、カムリやハイランダー、ヤリス、レビンなどいくつもの車種を生産している。生産能力は年産38万台、最近



はハイブリッド車が多いようだ。現在、3本の生産ラインを持ち、部品の現地調達率は72%と非常に高い。人材育成センターでは、一人ひとりの仕事のやり方を叩き込む。社員一人一人が品質管理の最高責任者と言う考え方で、生産ラインを止めることができる。改善も非常に盛んで一人一人が配膳スタッフの位置づけである。1台について1,500の検査項目がある。この工場の周辺には12の部品台車があり地下道でつながっているだからジャストインタイムが可能になる。工場内には「活力、感恩、創新」、「創新工場」などのスローガンが各所に貼ってあった。最終工程では人間の手で検査をする姿が印象的であった。ランプ、ハンドル調整、サイドスリップ、走行テスト、ブレーキの効き具合、排ガス、エンジンルーム、足回り、水漏れなど。従業員による改善提案は1人毎月一件。1万人いるから年間12万件の提案となる。採用率も高く90%を超え、不良品の比率は0.02%と世界トップクラス。同工場は、マカオや香港に近く自動車工場が多い。日本からは日産やホンダも進出している。中国は、いずれ中国のデトロイトにしたいという考えのようだ。

- ・午後2時30分から5時30分まで広東財經大学と多摩大学の合同発表会が開催された。多摩大学から4チーム、広東財經大学から6チームの合計10チームによる発表会が行われた。多摩大学チームからは、日本の観光、食文化、東京今昔物語、ファーストリテイリング社についての発表が行われた。広東財經大学チームからは日中の花火、民族衣装の比較研究のほか、中国のアニメーション、流行語、広東の飲茶文化、粵劇についての発表があり、両チームとも双方にとって非常に有益な発表会となった。



- ・午後3:00～5:30は久恒先生による講義が行われた。テーマは「図で考えれば、世界が見える」で、100名近い学生と外国語学院の先生4人（呉楓先生、陳慧華先生、黄彦先生、呉明宇先生）が受講された。終了後に行われたアンケートでは、「講座を聞いて本当に感心。図でものを考えると言う発想はとても新鮮。この方法で今まで見えなかったことがいっぱい見えてくる気がする」、「従来の常識と全く違う世界を開いてくれました。本質をつかむこ



とができる」、「今までと違い、いっふう変わったものを学びました。世間的常識を転覆した物事の学習方法を身につけたい。これからの人生設計を改めて頭で表現してみたい」「先生のゼミの中で中国韓国日本の学生に歴史について議論してもらいお互いを理解したというエピソードはすごく印象的でした。素晴らしいことです。コミュニケーション能力を向上させるために図解の利用が欠かせないことがわかった。これは世界平和にもつながる」とあるように、現地の教員、学生たちの間では大きな反響を読んだ講義だった。



- ・午後7:30～21:00時まで樋口先生の公開講座が行われた。テーマは「発信力をつける～書くことと話すこと」。発信力をつけるためには「自慢せよ。自虐ネタを混ぜる。情報を混ぜる。これでアピールできる。上司に対して反論する。凄いと思わせる」というように非常に分かりやすく解説がなされ、後半の小論文の書き方講座では、「型を使え。問題提起。～だろうか？確かに、～しかし～。理由は3つある。そもそも～、したがって・・・である」というふうに具体的な文型を使いながら小論文作成の極意を伝授された。受講生はほぼ全員日本語学科の学生ということもあり、受講態度や授業中に課された課題への取り組みの様子からして大変収穫の多い講座となったことが伺える。



4 日目：9月14日（水）企業見学、交流会

- ・早朝大型バスにて広州を出発し、深圳市内にあるフォックスコン（FOXCONN、富士康科技集団、日本ではホンハイとして知られる）社を訪問した。同社は、電子機器の生産を請け負う、電子機器受託生産（EMS）では世界最大の企業グループ。鮑副社長が自ら我々をお迎え入れ、まず同社の概要説明、工場見学をさせていただき、お昼はランチもご一緒していただいた。同社は、現在中国国内で四つの大規模生産拠点（深圳、重慶、武漢、昆山）を抱えているが、ここ



↑フォックスコン社の鮑詩詞副社長（真ん中の方）

深圳の工場は世界最大の生産拠点となっており、従業員数は20万人にも上る。同社の親会社であるホンハイは台湾にあり、研究開発拠点のみで、生産は世界展開をしているが、アジアが76%を占めている。

深圳工場では、パソコンやプリンター、モニター等の生産が主たる業務であるが、今後は新ビジネスやインターネット4.0などの新しいビジネスに進出するつものようである。現在はエンジニアが57%を占めているが、自動化が進行して将来はこれに加えマーケティングや研究開発の人員が増えてくるだろう。同社は人材の育成に熱心で、採用については7つの人材要件がある。

パーソナリティー、志、心構え、ハードワーク、経験、教育、スキル。また、上司と部下と一緒にテレビ会議に出るなどスピード感が特色である。

シャープはきめ細かさが特色だ。今後はシャープの中国本社は上海からこの地区に移すことになるなど、仕事のやり方も変えることになるのではないかと思われる。シャープを買収後、フォックスコンのスピードとシャープのハイクオリティーを組み合わせ、日台企業のビジネスアライアンスの新たな時代を切り開いていくのではないかと感じられた。

- ・午後7時より広東財経大学の学生が主催した交流会が行われた。広東大学の教員、学生たちの用意周到の準備のもと、歌あり、演劇あり、ゲームありと非常に楽しい雰囲気の中で、学生同士の親睦が図られた交流会となった。若者同士は若干の言葉の壁やあったものの、興味や関心事などの面では、むしろ共通項が多かったような印象を受けたし、今後においても今回のような交流プログラムを継続して行われる意義が大きいと感じた。

5日目：9月15日（木）広州市内視察

終日広州市内を視察。広東財経大学の学生（同時通訳クラスの学生）がガイド役となり、観光客役の多摩大学の学生に市内の歴史的名所や繁華街の視察の際の日本語のガイドをしていた。本学が提唱し実践しているアクティブラーニングを現地にて実際に行い、非常に教育的効果の高い活動となった。



6. 総括：

- (1) 双方の教員による講義は、学生たちに複眼的に物事を捉える視点と学力の向上に役たつものとなった。また、教員同士においても教育、教授法の改善や充実の観点から非常に有益な教育交流の機会となった。
- (2) 学生同士による合同発表会の実施により、参加した学生たちは物事を分析し、その本質を探り、最終的に解決策を提示するプロセスにおいて、より広い視点に立って複眼的に物事の本質を捉えることの重要性を認識することができた。
- (3) 企業見学を通じて、学生諸君にはグローバルな舞台でビジネスを推進する上で何が重要なのか、企業が求める人材像とは何か、といった問題意識を持たせることができ、また今後キャンパスライフを送るうえで注力すべき分野や目指すべき目標も明確になったのではないかと思われる。
- (4) 両大学間では、今後学生だけでなく教員同士の交流を深化することについて認識が一致した。特記すべきは、今回の交流がきっかけで双方の参加教員をメンバーとする中国国内の科研の共同研究がスタートしたほか、来年中国への留学を希望する学生も現れるなど、当初の予想以上の成果を上げることができた。
- (5) 今回は本学と広東財經大学との提携に基づく日中大学間の交流活動だったが、広東財經大学の先生方、学生さんたちのおかげで非常に快適に過ごすことができた。また、大学の実情もわかり、中国の状況も知ることができた。中国は、とてつもない躍動で、飛躍的な発展の中にあり、ネット環境など日本よりも進んでいる面も多くある。

7. 参加学生の感想（抜粋）

- ① 中国へ出発前は領土問題をめぐる日中間の政治的対立などもあり少し不安だったが、暖かく迎え入れた現地の学生たちとの交流を通じて不安が解消された。現地で案内や通訳をしてくださった広東財經大学の先生、生徒に感謝したい。
- ② 今回の短期留学はかなり刺激的で今までの価値観が変わり、視野も広がった気がした。日本の大学生と比べ現地の学生は勉強の量や学ぶことに対する意識の面で非常に高いことが分かった。講義に対しての姿勢、そして歓迎の心、少ない滞在期間の中ではあったが、現地の学生から様々なことを学んだ。2回ほど現地の学生とともに講義を受けたが、全て日本語で行われ、かつとても内容の濃い講義であったにも関わらず生徒一人一人が講義内容をしっかりと理解しようとしていて、とてもレベルの高い講義内容で驚いた。今までの自分が恥ずかしくなった。これからは学習時間を増やし質も高めていこうと思う。すごくいい経験になった。
- ③ 今回の留学で語学の大切さを実感した。現地では知らない言語が飛び交っており、自由時間に飲食店に入る時でさえ戸惑ったりした。次回行く機会があるなら、もう少し外国語の学習をしていけば中国の見え方も変わってくるのではないかと思う。
- ④ 両大学の学生による合同プレゼンテーションでは、現地の学生は日本人よりも日本のことをよく知っているのではないかと思うくらい、日本のことを良く勉強している。
- ⑤ 今回の留学プログラムに参加したきっかけは、多摩大学で知り合った中国人留学生から

のお誘いであったが、日本のニュース番組などで見られる中国国内に対する印象があまりいいものではなかったため、最初は全然乗り気ではなかったものの最終的に若干無理して参加した。しかし、自分の視野が狭かったのだと中国に来てから気づかされた。現地の学生たちと触れ合う機会のなかで、学生達のある雰囲気を感じた。それは、「日本人の学生から色々と日本のことを学びたい」という雰囲気だった。日本語を学んでいる学生たちばかりだったのか、日本に対しての偏見もなく、日本語しか話せない自分にも伝わるように言葉を選びながら話してくれ、我々を客人のようにもてなしてくれた。今回の経験から自分の視野の狭さを知り、人間って国籍どうこうではないのだということを感じた。

- ⑥ 中国と言ったら、「PM2.5」、「反日」、「マナーが悪い」などのイメージを持っている人はいるはずだ。日本のニュースではそれくらいしか伝えないのだからそれがリアルであると思込んでいる人は多いはずであろう。しかし、本当の中国（広州市）では、環境はそんなに悪くないし反日デモも無い。少しマナーの悪い人もいるが、それ以上に皆暖かい人々で笑顔が溢れ、そして料理もとても美味しい。これがリアルな中国の一面であり、日本のニュースだけでの思込みは間違いである。思込みだけで過ごすのはもったいない。是非他の人たちにも中国へ足を運んで欲しいと思う。

以上